横浜三工会 News

No.19
2026年 9月吉日

横浜国立大学 工学部 物質工学科および
理工学部 化学・生命系学科内工学系同窓会



CONTENTS

・副会長挨拶
・着任教員のご挨拶
・退任の教員のご挨拶
・受賞近況情報
・卒業生便り
・会計報告
・会計報告
・活動報告
・事務局からのお知らせ

古賀　雅隆副会長のご挨拶

古賀雅隆（横浜三工会副会長、工修＝安全工学）



私たちは今、大きな転換点に立っています。蒸気機関が産業を、電気やインターネットが暮らしと社会を変えたように、AIは私たちの働き方や創造性に大きな影響を与え始めています。

約20億年前、酸素は生物にとって毒でした。しかし、それを利用する生命の登場で生物は飛躍的な進化を遂げました。AIも現代における「新しい酸素」かもしれません。酸素が進化に寄与した一方、多くの絶滅を招いたように、AIにも恩恵と危険の両面がありそうです。

AIはすでに業務効率化や就職活動、FaceIDなど身近に使われています。しかし重要なのはどう活用するかです。個人設定でAIを飼いならしても良いですが、「虫」「鳥」「魚」、そして「蝙蝠」という四つの「目」で、現在とこれまでを精査し、先を読んでどう使いこなすかを見極めることが大切です（ちなみに行動は半歩先が鉄則ですが、先を読むのは一歩以上が必要だと思います）。虫の目で細部を、鳥で全体を俯瞰、魚でニーズや時代の流れを読み、蝙蝠で多様な視点、立場から考えるのです。

私はネットコミュニケーションを専門とし、情報メディアの変化や時代の流れを分析して、法人の情報発信のあり方を記事や講演などで提案・アドバイスしてきました。役立ったのが、メディアの変遷や現在位置を四つの目で分析、図解しながら、ベストウエイを示す手法です。隆盛と興亡を示したネットウエーブと呼ぶ図や、距離や時間からの解放と双方向性を軸に取ったプロットなどで変化を読み解きました。AIも、これまでの3つの波や現状、データセンター問題等も含めて分析すれば、先を見た歩みを進められます。

先生や友との真剣な議論と語らい、遠回りした経験、乗り越えた失望など、効率では測れない時間が私を育ててくれました。正解を素早く得ることやコスパの追求だけでなく、人と支え合いながら進むことに大きな価値があります。自ら考え、迷い、失敗から学ぶ力を弱めてはいけません。

皆様もそれぞれの立場で新しい時代と向き合っていることでしょう。時代をしなやかに歩み、互いに学び合い、語り合える三工会でありたいと願っています。

着任教員のご挨拶

工学研究院　機能の創生部門
菅原勇貴助教の研究紹介
「水素社会実現に向けた水電解用触媒の研究開発」



2026年4月1日より横浜国立大学大学院工学研究院に着任しました菅原勇貴と申します。私は東京工業大学大学院総合理工学研究科化学環境学専攻で博士号取得後、ドイツのカールスルーエ工科大学とハレ-ヴィッテンベルク大学でポスドク、東京工業大学科学技術創成研究院化学生命科学研究所で特任助教および助教そして大学統合で名称変更となった東京科学大学総合研究院の助教を経て、現在は本学大学院工学研究院機能の創生部門光島・黒田・菅原研究室として活動しております。私は水電解・燃料電池に用いるエネルギー材料を専門としており、それら電気化学デバイスの高効率化を目指し、実験・計算化学・インフォマティックス手法を活用しながら、材料の設計論に基づく高性能材料の開発を推進しています。

今般の地球環境問題・エネルギー問題の解決のためには化石燃料に依存しない持続可能な社会の実現が喫緊の課題となっており、燃やしても二酸化炭素を排出しない水素をエネルギーキャリアとして利用する水素社会の実現が求められています。そのため再生可能エネルギー由来の電気で水を電気分解し水素を製造する水電解技術に注目が集まっています。水電解の高効率化のためには、電極に用いる安価で高活性な触媒の開発が必須です。私の研究では、実験・第一原理計算・インフォマティクス手法を活用し、独自の視点である触媒結晶の構造と電子状態により電気化学触媒作用を表現するとい

う観点から、水電解反応に関する未知の触媒作用の法則を発見しました。そして構造および電子状態という利便性の高い性能指標による高性能電気化学触媒の設計論を提案しました。当設計論により触媒開発の大幅な効率化を可能とし、安価で高性能な有望触媒の開発に成功しました。私たちが確立した電気化学触媒の設計論は、持続可能な水素社会の実現に貢献するものです。横浜国立大学では上記の研究を継続するとともに、触媒・電解質・電解セルを含むデバイス全体の研究にも取り組みます。電解技術・電気化学分野の一大拠点として名高い横浜国立大学での教育研究生活が楽しみです。ご指導ご鞭撻のほどどうぞお願いいたします。

退任教員のご挨拶

中井里史名誉教授のご挨拶



2026 年 3 月 を もって 横浜国立大学を定年退職しました中井里史です。本学には 1997 年 8 月に環境科学研究センター（当時）に助教授として着任し、工学研究科（当時）にもひっそり所属していました。その後、センターの発展的解消に伴い 2001 年に設置された環境情報研究院・学府に所属し定年まで過ごしてきましたが、学府の改組に伴い、担当専攻が、環境マネジメント専攻リスクマネジメントコース、環境リスクマネジメント専攻生命マネジメントコース､そして人工環境専攻と変わりました。３回も変わってしまうと、以前の所属名がわからなくなってしまうのが困りものです。この間、環境リスクマネジメント専攻長と人工環境専攻長を務めました。また 2013 年からは、こちらも学部改組となった理工学部化学・生命系学科化学応用 EP も担当してきました。私自身は、理学部や工学部の出身ではなく、キャリアの最後に理工学部を担当することになるとは思っていませんでしたし、担当することが決まった際はどうしたものかと思いましたが、まあなんとか最後まで務めることができたかなと勝手に思っています。定年直前には学科長も務めましたが、学科長については、さすがに青天の霹靂ではありました。

私自身の出身は、東京大学医学部保健学科（現健康総合科学科）であり、私自身は理工学の教育は受けていません。研究は、環境－特に私が学生時代は大気汚染や室内空気汚染－の健康影響評価（疫学研究）、曝露評価、調査方法論が主たるテーマとなります。本学に来てからは、私を採用してくれた中西準子先生とともに環境（健康）リスク評価も行ってきてはいますが、この原稿を読んでいただいている方にとっては、全般的に何をやっている研究なんだ、と思われるかなとも思っています。そのため本学に来た際は、私にとって知らない世界にやってきたといった印象があり、何をするにもかなりいろいろ構えてしまっていましたし、逆に私の方からすると、どうしてそのような検討をするのかな、それでは論理的に話しはまとまらないのでは、などと思うこともありました。ただ時間を経るにつれ、おそらく主にバックグラウンドに基づくものだと思われますが、見ている側面が違っていることが原因であって、最終的には様々な側面からの検討や、統合した見方をすることが必要になってくるはず、という考えに至り、学生への指導も含めて、自分が経験してきたこと、あるいは自身が持っているものとは異なる視点での研究、さらには普段の生活の中でも多様な視点を持つことの必要性を訴えてきたつもりでいます。その成果が得られたかどうかは何とも言えませんし、学生さんたちがどう思っていたかについても定かではありません。ただ、自由に研究し、おそらく異なる視点からの発言を多くしてきたことは間違いないと思っており、最終的には本学では良い時間を過ごせたと思っています。

受賞近況情報

第 4 回環境化学物質合同大会で「優秀発表賞」を受賞



2025 年 7 月 15 日 ～ 18 日、「山形テルサ」および「やまぎん県民ホール」で開催された第 33 回環境化学討論会 / 第 29 回日本環境毒性学会研究発表会の合同大会である「第 4 回環境化学物質合同大会」にて 理工学部 化学・生命系学科 化学応用教育プログラム 4 年の呉英碩さん (指導教員：三宅祐一教授) が 優秀発表賞（Presentation Award）を受賞しました。

同賞は、同合同大会における研究発表の中から、選考委員会による審査を経て、優秀な発表を行った学部学生および短大生・高専生に贈られる賞です。

発表題目は「PFAS 包括的管理に向けた燃焼イオンクロマト法および吸着性有機フッ素分析の高感度化」であり、三宅祐一教授が研究分担者を務める環境研究総合推進費「廃棄物の処理・処分・再資源化の段階における PFAS の包括的な評価・管理のためのモニタリング／モデリング手法の開発と応用」（JPMEERF20243003）の一環として実施された研究です。

火薬学会・秋季研究発表会で「優秀講演賞」を受賞

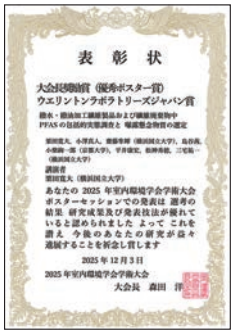


2025 年 11 月 6 日～ 7 日にかけて広島国際会議場で開催された 2025 年度火薬学会秋季研究発表会において、理工学部 化学・生命系学科化学応用 EP4 年生の原田拓海さん (指導教員：伊里友一朗 准教授) が 優秀講演賞を受賞しました。本賞は審査委員会による審査を経て、特に優秀な講演であると評価を受けて受賞したものです。

講演題目は「電圧印加による ADN/ ヒドロキシエチルヒドラジニウム硝酸塩混合系の着火過程に与える交流周波数の影響解析」です。次世代宇宙機用推進剤とその燃焼システムに関連した研究であり、交流電圧が印加された推進剤が着火に

至るまでに要する時間について定量予測するモデルを構築し、これを実験的に検証したものです。

室内環境学会学術大会で「大会長奨励賞（優秀ポスター賞）」と「ウエリントンラボラトリーズジャパン賞」を受賞



2025年12月2日～5日、北九州国際会議場で開催された2025年室内環境学会学術大会にて理工学部 化学・生命系学科 化学応用教育プログラム4年の栗田寛大さん（指導教員：三宅祐一 教授）が大会長奨励賞（優秀ポスター賞）（ウエリントンラボラトリーズジャパン賞）を受賞しました。

同賞は、学術大会における研究発表の中から、選考委員会による審査を経て、優秀な発表を行った学生会員に贈られる賞です。ウエリントンラボラトリーズジャパン賞は、カテゴリー内で最も優れた発表に贈られる【最優秀賞】に該当します。

発表題目は「撥水・撥油加工繊維製品および繊維廃棄物中PFASの包括的実態調査と曝露懸念物質の選定」であり、三宅祐一教授が研究分担者を務める環境研究総合推進費「廃棄物の処理・処分・再資源化の段階におけるPFASの包括的な評価・管理のためのモニタリング／モデリング手法の開発と応用」（JPMEERF20243003）の一環として実施された研究です。

化学工学会第91年会本部大会で「最優秀学生賞」を受賞



2026年3月17日～19日に京都大学において開催された化学工学会第91年会本部大会において、理工学部化学・生命系学科化学応用教育プログラム　室町研究室所属　学部4年生　淺野歩さん（指導教員：室町実大 准教授）が発表し、最優秀学生賞を受賞しました。

受賞論文の題目は「C2対称性を持つアルキルアンモニウム塩のハイドレートの結晶構造と生成条件の解明」です。次世代のエネルギー輸送・貯蔵材料として期待されるセミクラスレートハイドレートに関する研究成果を発表しました。本研究では、特定のアンモニウム塩の分子対称性に着目し、より安定なハイドレートを生成させるための新たな分子設計を提案しました。実際に合成した物質の熱力学的特性を測定し、結晶構造の観点からその安定性メカニズムを考察した点が高く評価されました。

第5回環境化学物質合同大会で「優秀発表賞（Cambridge Isotope Laboratories Award）」を受賞

2026年6月23日～26日、「出島メッセ長崎」で開催された第34回環境化学討論会／第30回日本環境毒性学会研究発表会の合同大会である「第5回環境化学物質合同大会」にて理工学部 化学・生命系学科 化学応用教育プログラム4年の渡邉彩香さん（指導教員：三宅祐一 教授）が優秀発表賞（Cambridge Isotope Laboratories Award）を受賞しました。



同賞は、同合同大会における研究発表の中から、選考委員会による審査を経て、優秀な発表を行った学部学生および短大生・高専生に贈られる賞です。

発表題目は「加水分解・酸化分解法による食品用耐油紙廃棄物中PFASの分解生成能評価」であり、三宅祐一教授が研究分担者を務める環境研究総合推進費「廃棄物の処理・処分・再資源化の段階におけるPFASの包括的な評価・管理のためのモニタリング／モデリング手法の開発と応用」（JPMEERF20243003）の一環として実施された研究です。

第5回環境化学物質合同大会で「優秀発表賞（SETAC Japan Award）」を受賞



2026年6月23日～26日、「出島メッセ長崎」で開催された第34回環境化学討論会／第30回日本環境毒性学会研究発表会の合同大会である「第5回環境化学物質合同大会」にて理工学部 化学・生命系学科 化学応用教育プログラム4年の堀内宏樹さん（指導教員：三宅祐一 教授）が優秀発表賞（SETAC Japan Award）を受賞しました。

同賞は、同合同大会における研究発表の中から、選考委員会による審査を経て、優秀な発表を行った学部学生および短大生・高専生に贈られる賞です。

発表題目は「イオン性・中性PFAS網羅分析法を用いた室内空気汚染の実態調査」であり、三宅祐一教授が研究分担者を務める環境研究総合推進費「廃棄物の処理・処分・再資源化の段階におけるPFASの包括的な評価・管理のためのモニタリング／モデリング手法の開発と応用」（JPMEERF20243003）の一環として実施された研究です。

受賞者多数のため、以下は受賞者と受賞名称を記載させていただきます。

日本水環境学会・年間優秀論文賞（メタウォーター賞）を受賞

大学院理工学府 大石将和さん（指導教員：新田見匡 准教授）
大学院理工学府 加藤愛さん（指導教員：新田見匡 准教授）
大学院工学研究院 新田見匡 准教授

Asia Pacific Symposium on Safety 2025・Best Student Paper Award 賞を受賞

大学院環境情報学府 石川怜さん（指導教員：熊崎美枝子 教授）

日本環境化学会・優秀発表賞（SETAC Japan Award）を受賞
環境情報学府 呉英碩さん（指導教員：三宅祐一 教授）

日本環境化学会・優秀発表賞（Presentation Award）を受賞
環境情報学府 宮本睦子さん（指導教員：三宅祐一 教授）

日本環境化学会・環境化学学術賞を受賞
環境情報研究院 三宅祐一 教授

水素エネルギー協会・学生優秀発表（ポスター）賞を受賞
大学院理工学府 西野翔さん（指導教員：松澤幸一 准教授）

室内環境学会・大会長奨励賞（優秀ポスター賞）とウエリントンラボラトリーズジャパン賞を受賞
大学院環境情報学府 楊舒涵さん（指導教員：三宅　祐一 教授）

室内環境学会・大会長奨励賞（優秀口頭発表賞）とウエリントンラボラトリーズジャパン賞を受賞
大学院環境情報学府 谷涼那さん（指導教員：三宅　祐一 教授）

日本材料学会疲労部門委員会・優秀講演発表賞を受賞
大学院理工学府 前田成輝さん（指導教員：高橋宏治 教授）

化学工学会東北支部、関東支部、北海道支部・優秀学生賞を受賞
大学院理工学府 牧野珠夕さん（指導教員：金井俊光 教授）

化学工学会東北支部、関東支部、北海道支部・学生奨励賞を受賞
大学院理工学府 岩渕直輝さん（指導教員：金井俊光 教授）

化学工学会東北支部、関東支部、北海道支部・優秀学生賞を受賞
大学院理工学府立元暖乃さん（指導教員：金井俊光 教授）

火薬学会・優秀講演賞を受賞
大学院環境情報学府 大森稜介さん（指導教員：伊里友一朗 准教授）

日本エネルギー学会・第 34 回日本エネルギー学会大会ポスター発表賞を受賞
大学院環境情報学府 加藤椋平さん（指導教員：本藤祐樹 教授）
大学院環境情報学府 矢木健登さん（指導教員：本藤祐樹 教授）
大学院環境情報学府 鈴木信太朗さん（指導教員：本藤祐樹 教授）

化学工学会・第 56 回秋季大会 優秀発表賞を受賞
大学院理工学府 立元暖乃さん（指導教員：金井俊光 教授）

環境科学会・優秀発表賞（富士電機賞）を受賞
大学院環境情報学府 田川瑛梨さん（指導教員：三宅祐一 教授）

人工知能学会・全国大会学生奨励賞を受賞
大学院環境情報学府 風呂田潤さん（指導教員：伊里友一朗 准教授）

日本環境化学会・優秀発表賞（GL Sciences 賞）を受賞
大学院環境情報学府 南村紬さん（指導教員：三宅 祐一 教授）

日本環境化学会・優秀発表賞（Royal Society of Chemistry 賞）を受賞
大学院環境情報学府 田川瑛梨さん（指導教員：三宅 祐一 教授）

日本環境化学会・優秀発表賞（GL Sciences 賞）を受賞
大学院環境情報学府 谷涼那さん（指導教員：三宅 祐一 教授）

日本ばね学会・優秀ポスター賞を受賞
理工学府 前田成輝さん（指導教員：高橋宏治 教授）

火薬学会・火薬学会秋季研究発表会 優秀講演賞を受賞
大学院環境情報学府 山本峻也さん（指導教員：熊崎美枝子 教授）

卒業生便り

鹿島建設株式会社　清水大佑様
－難しい課題に向き合う面白さ－



2024 年 に 環境情報学府人工環境専攻を修了した清水大佑と申します。在学中は亀屋研究室に所属し、環境中の化学物質管理に関する研究に取り組んでいました。

修了後 は 鹿島建設株式会社 環境本部に入社し、現在 3 年目になります。就職活動では、建物やインフラなどのものづくりと、地域の人々や自然に関わる環境分野の両方に携われる点に魅力を感じ、現在の会社を選びました。現在所属している環境本部では、土壌汚染、水処理、廃棄物処分場、再生可能 エ ネ ル ギ ー、脱炭素、自然再興など、幅広い環境分野の業務を行っています。その中で私は土壌汚染を担当するグループに所属し、建設工事に伴う土壌汚染対策法に基づく調査や対策の計画、行政との協議などを行っています。

最近では、PFAS と呼ばれる有機フッ素化合物への対応にも携わっています。土壌環境では法規制や対応方法が十分に定まっていない部分もあり、明確な正解がない中で、どこまで調査し、どのように対策するのかを考えていかなければなりません。難しさを感じる場面も多いですが、若手でも専門的な立場から意見を求められ、自分で考えた調査や対策が実際のプロジェクトにつながっていくところには面白さを感じています。こうした仕事をする中で、実際に働いてみて強く感じているのは、専門知識を持っているだけでは仕事は進まないということです。一つの案件だけでも、現場、設計、営業、施主、行政、協力会社など、多くの人と関わります。

その中では、専門的な内容を相手に分かりやすく伝え、お客様に判断してもらったり、現場に対応をお願いしたりする場面が多くあります。誰に、何を、どこまで伝えるべきかを考えながら仕事を進めることは難しいですが、同時に面白さも感じています。また、関係者内で気軽に相談できる関係をつくることが、案件を円滑に進める上で非常に重要だと感じています。大学で学んだ、化学物質のリスクをどのように捉え、規制が十分に整っていない段階でどのように管理していくかという考え方は、現在の仕事でも非常に役立っています。特に未規制物質への対応では、明確な基準や正解がない中で、どこまで調査し、どのように対策・管理していくべきかを考える必要があり、学生時代に学んだことが実務につながっていると強く感じます。また、研究を通して身につけた、物事を整理し、筋道を立てて考え、それを相手に伝える力も、日々の仕事でとても役立っています。

社会人になって３年目となり、さまざまな案件を経験する中で、自分なりに考え、判断しながら仕事を進める機会も増えてきました。難しい課題に向き合うことも含めて、今の仕事の面白さを感じています。これからもいろいろなことを経験しながら、仕事を楽しんでいければと思っています。

東京大学大学院博士課程　木村悠河様
－横国大で培った研究力－



2024 年にバイオ EP を卒業した木村悠河と申します。学部時代は飯島研究室に所属し、Tamoxifen という乳がんの治療薬に用いられる薬剤を白血病の薬に転用するための研究と、機械学習を用いてがん細胞の画像診断システムを開発するための研究を行っておりました。その後、修士課程からは東京大学大学院薬学系研究科に進学し、修士時代は神経科学のラボで研究を行い、博士課程の現在はクライオ電子顕微鏡でタンパク質の構造を解析するラボで研究を行っています。

飯島研には ROUTE 時代も含めると学部２年次から３年間在籍していて、研究体力の基礎をつけさせていただいたと実感しております。学部２年次には ROUTE の研究発表会にて最優秀賞を頂いたこともありました。成果という意味でも、基礎能力という意味でも色々なものを頂いて、いい思いをさせて貰ったと実感しております。そして、その結果が修士時代の２年間という短期間で Biol. Pharm. Bull. 誌に論文掲載ができたことと、日本薬学会年会での学生優秀発表賞受賞に繋がったと思っています。研究キャリアの始まりが飯島研でよかったと心から思っており、学部４年でラボを離れたにも関わらず今も昔も良くしてくださっている飯島先生には感謝しかありません。

東大にはクライオ電子顕微鏡を始めとする最先端の設備や、３～４個実験室があるようなラボもあり、資金規模の大きさというものを実感しています。このような恵まれた環境で研究ができていることに日々感謝をしながら、自分の研究がいつか大きな何かに繋がることもあるかもしれないと思いつつ、１つ１つの地道な実験に取り組んでいる毎日を過ごしています。

自分は博士課程１年生になり、この９月でちょうど５年間の大学院生活も折り返し地点になります。横国を出てからもう 2.5 年も経ったのかと驚きますが、横国で培ってきた研究の基礎力というものは馬鹿にならないなと常々感じております。これからも日々の実験やディスカッションなど、やるべきことを１つ１つこなしていき、成果を積み上げて行きたいと思っております。

会計報告

2025 年 11 月 22 日開催の横浜三工会総会で承認されました、令和６年４月１日～令和７年３月 31 日の会計を報告させていただきます。

令和６年４月１日～令和７年３月 31 日

収入

前年度繰越金	¥10,906,023
横国大校友会（バイオ EP1 年生）	¥750,000
名教自然会（化学応用 EP2 年生）	¥2,100,000
年会費・寄付など	¥530,000
その他（利子）	¥1,560
合計	¥14,287,583

支出

工学部同窓会連合年会費	¥173,000
三工会ニュース印刷・配送	¥1,208,074
アルムネット（名簿システム導入）	¥84,880
学生表彰（奨励、プレゼン賞）	¥369,296
学生イベント支援	¥159,668
卒業生記念品	¥169,960
今年度寄付金、永久年会費入金者お礼品発送費	¥2,520
その他事務消耗品、手数料等	¥72,593
合計	¥2,239,991
残高	¥12,047,592

活動報告

2025 年 10 月 1 日に化学応用 EP・横浜三工会共催 ３年生向けの研究室配属説明会を開催！！

2025 年度の研究室説明会は 2025 年 10 月１日（水）に対面で実施しました。学部３年生およそ 70 人、研究室に所属している学生およそ 50 人が参加し、計 120 人ほどと、大きな会になりました。研究室説明会では、研究室所属学生に A2 サイズのポスターを事前に作成していただきました。また、横浜三工会のご援助により食事やアルコール飲料も用意し、昨年度までの形式よりも懇親会としての側面を打ち出したことで大幅に参加者数が増加し、研究室側の学生を含めて多くの人に楽しんでいただけたと考えています。学部３年生から各研究室の学生へ積極的に質問している様子も見受けられ、非常に有意義な会になったと考えております。今年度の改善点を活かして、来年度以降もさらに良い会となるよう努めます。

2025 年 10 月 2 日に化学応用 EP2 年生歓迎会を 開催！！

横浜三工会のご支援のもと、2025 年 10 月２日に化学応用 EP2 年生対象の歓迎会を大学会館３階ポルティにて開催いたしました。この会は２年生が化学応用 EP へ配属されたことを歓迎しての開催されるものです。今年は、参加者の参加し易さを考え、例年の夕方開催と異なり、お昼休み時間に開催いたしました。学部２年生と化学応用 EP 教員、そして研究室に所属している４年生や修士学生を加えまして、全体

で 100 名近くが参加しました。EP 代表の亀屋教授より挨拶を頂いた後、乾杯を行い、学生間、学生と教員間で会話が大いに盛り上がりました。2 年生が教員と直接話すことや上級生 に相談できる機会ができたことは大変有意義でした。ご支援いただき誠にありがとうございました。



2025 年 11 月 22 日に令和 7 年度総会・講演会・懇親会を開催 !!

横国 Day（ホームカミングデー）に合わせて 2025 年 11 月 22 日に横浜三工会総会・懇親会を開催致しました。総会において、2024 年度の活動報告、会計報告が承認されるとととともに、奥山邦人名誉教授による特別講演会及び懇親会を開催しました。総会において、化学・生命系学科化学応用 EP4 年生 10 名、バイオ EP4 年生 3 名を対象として、塩沢会長から学業優秀者の表彰として横浜三工会学生奨励賞を授与致しました。



2026 年 3 月 23 日化学・生命系学科化学応用 EP/ バイオ EP の学位授与式を開催 !!

2026 年 3 月 23 日 に 化学生命系学科、化学応用 / バイオ EP の学位授与式を執り行いました。その式の中で例年通り、化学応用 EP は卒業論文審査会におけるベストプレゼンテーション賞を 4 名、グッドプレゼンテーション賞を 6 名、バイオ EP は最優秀学生賞を 1 名、優秀学生賞を 2 名の学生に賞状と図書券を贈呈しました。また卒業記念品として YNU オリジナルトートバック（横浜三工会名入り）を卒業生全員に贈呈しました。





事務局からのお知らせ

本会教員の異動

- 2026 年 3 月 31 日付 け で　バ イ オ EP（工学研究院）栗原靖之先生 が定年退職 され、4 月 1 日付け で名誉教授の称号が付与されました。
- 2026 年 3 月 31 日付 け で　化学応用 EP（環境情報研究院）中井里史先生 が定年退職 され、4 月 1 日付け で名誉教授の称号が付与されました
- 2026 年 3 月 31 日付け で　バイオ EP（環境情報研究院）平塚和之先生 が定年退職 され、4 月 1 日付け で名誉教授の称号が付与されました。
- 2026 年 4 月 1 日付 け で　バ イ オ EP（環境情報研究院）岩渕 望先生が助教に着任されました。
- 2026 年 4 月 1 日付 け で　化学応用 EP（工学研究院）菅原勇貴先生が助教に着任されました。
- 2026 年 4 月 1 日付 け で　化学応用 EP（工学研究院）新田見匡先生が教授に昇任されました。

OB・OG 役員、学生役員の募集



当同窓会は OB・OG、学生のボランティアで運営されております。駅周辺で会議や懇親会を開催し、自発的に楽しく活動されております。つきましてはボランティア活動となる運営にご参画頂ける OB・OG、在学生の方は在学学生役員、または事務局までご連絡ください。

横浜三工会の OB・OG、在学生が盛んに交流できるよう、今後とも活動に支援していく所存でございます。何卒よろしくお願い申し上げます。

横浜三工会
INTEGRATE US, INNOVATE ALL.

（事務局）
〒240-8501 横浜市保土ケ谷区常盤台 79-5
横浜国立大学 理工学部 化学・生命系学科 化学応用 EP 内
TEL:045-339-3991　FAX:045-339-4012
E-mail:yokohamasankoukai@ynu.ac.jp

https://sankou-kai.ynu.ac.jp/
https://www.facebook.com/groups/ynusankoukai/

化学応用 EP のホームページ http://www.cap.ynu.ac.jp/ も参照ください
バイオ EP のホームページ http://www.bio.ynu.ac.jp// もご参照ください